

2020年4月19日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司式者 横山ゆずり

前 奏

招 詞

イザヤ書 65章 1節

わたしに尋ねようとしないうちにも
わたしは、尋ね出される者となり
わたしを求めようとしないうちにも
見いだされる者となった。

わたしの名を呼ばない民にも
わたしはここにいる、ここにいると言った。

讃美歌

讃美歌 21-14 (たたえよ、王なるわれらの神を)

1番のみ

「たたえよ、王なるわれらの神を
ゆるされ、生かされ、従うものよ、
ハレルヤ、ハレルヤ、とこしえの主を。」

交 読

詩編 118篇 19~29節 (p. 130)

正義の城門を開け

わたしは入って主に感謝しよう。

これは主の城門

主に従う人々はここに入る。

わたしはあなたに感謝をささげる

あなたは答え、救いを与えてくださった。

家を建てる者の退けた石が
隅の親石となった。

これは主の御業

わたしたちの目には驚くべきこと。

今日こそ主の御業の日。

今日を喜び祝い、喜び踊ろう、
どうか主よ、わたしたちに救いを。

どうか主よ、わたしたちに栄えを。

祝福あれ、主の御名によって来る人に。

わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する、
主こそ神、わたしたちに光をお与えになる方。

祭壇の角のところまで

祭りのいけにえを綱でひいて行け。

あなたはわたしの神、あなたに感謝をささげる。

わたしの神よ、あなたをあがめる。

恵み深い主に感謝せよ。

慈しみはとこしえに。

祈 禱

教会の頭である主イエス・キリストの父なる神さま、
あなたの御名をあがめます。

すでにわたしたちは、主イエスの復活をお祝いする
時が与えられ、その恵みの内に歩ませていただいております。

ります。感謝いたします。けれど、いまだ終息の兆しが見えない新型コロナウイルス感染によって、多くの不安と混乱に中にいることを認めざるを得ません。だからこそ、わたしたちはどのようなところでありましても、この状況に真摯に向き合うこと、いのちを守るために共に働き協力し合うことができますよう、お支え下さい。とりわけ医療の現場で闘っておられるあなたの愛する人々、また福祉の現場で働いておられるあなたの愛する人々、また政に携わるあなたの愛する者一人一人の上に、またあなたから遣わされたところで労しておられるあなたの愛する人々の上に、あなたの深い憐れみと顧みりが豊かにありますように。あなたが愛をもってこの世界をお創りになられたこと、そのことを感謝をもって受けとめ、そしてそのいのちを守るためにわたしたちの言葉と行動とをお守りください。またわたしたちの成し得ないことにおいては、幾重にもあなたが支え顧みてくださいますように。

今よりみ言葉に聴きます。わたしたちのこころを整え、聴く耳を、受けとめる心をお与えください。み言葉の中にあるいのちに触れ、そこから新しいいのちと恵みとをいただくことができますように。この感謝と願いとをわたしたちの救い主、主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン

讚美歌 讚美歌 21－329（目覚めよ、歌えよ）

1 番のみ

「目覚めよ、歌えよ、声をあげよ。

主は復活された、喜び祝え」

説教 「悲しむ神」

今日の説教題は、「悲しむ神」としました。神が悲しむということ、神が悲しむことがあるのだろうか、そうしたことを限られた時間の中で聞いていきたいと願っています。

悲しむ、これはわたしたちの日常生活の中でさまざまに経験することです。わたしたちが悲しむとき、それは自分のことか、あるいは誰かのために悲しむのか、いろいろありますが少なくとも言えることがあります。それは、わたしたちが悲しむとき、それはその対象になる人や出来事に対して、どうでもいいものではないということ、少なくとも自分にとって大切だからこそ、悲しむのだということです。だとすれば、ここで神が悲しむ、悲しんでおられる神がおられるのだとすれば、それは、神にとって大切な、愛すべき何かがあるからだということになります。そこで、今日の聖書箇所では語られている譬えの場

面がどこかと言えば、「ぶどう園」です。しかもこれは、ただのぶどう園ではなく、12節にあるように、このたとえ話を聞いている「彼ら」とはつまり、「祭司長、律法学者、長老たち」

(11:27) のことであり、「イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいた」とありますから、自分たちに対して語られたこと、もっと言えば、ここでのぶどう園とは自分たちのこと、自分たちがぶどう園に譬えられているのだと理解していることになります。

しかもここでのぶどう園とはどんなぶどう園かという
と、「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た」とあります。まずこの主人は、旅に出る前に一所懸命ぶどう園を作ったことがわかります。使用人、農夫たちにだけ働かせたのではないだろうと思います。財産をそこにつぎ込んで、ぶどう園に必要な作業、ここでは垣根を作って、搾り場を掘って、しかも見張りの者が必ず立たなければならないやぐらを立てます。そうやって、収穫の時が来るまでの準備をすべてやり終えて、

さあ、後は農夫たちがこつこつと自分たちのすべき仕事をすれば、確実に収穫が望めるところまで整えて、この主人は旅に出たのです。主人は自分のすべきことはすべてやり終えて、任せて出かけます。決して、農夫たちに資金を渡して、お前たちの力でやってみなさいと言われたのではない。少なくとも収穫が約束された状態で、ぶどう園を彼らに預けたというのです。そしてここでイエスさまが言っておられることは、このぶどう園の主人は、父なる神さまのことなのだということです。

ここから分かることは、神さまがわたしたちに預けて下さったぶどう園、つまりこの世界、わたしたちの人生は、決して実りのない、痩せた世界ではなく、わたしたちのために神さまが一所懸命に整え準備して預けてくださった世界なのだということです。もしかすると、今わたしたちが置かれている状況からみれば、何を呑気なことを言っているのか、とそう考える人がいるかもしれません。教会に来ている人の中にも、そう考える人がいるかもしれません。けれど、もしそうであればそれはやはり神さまの願いを誤解していることになります。わたし

たちがイエスさまのお心に沿って聖書のみ言葉に聴くのであれば、それはやはりこの世界は、実りあるこの世界として神さまが用意してくださったこの世界であり、その世界に対して期待をもってわたしたちにお預けてくださった神さまの願いに応えるようにとの願いがここにあるということです。だとすれば、わたしたちはやはりこの世界から逃げるのではなく、また、こんな世界を預けられても、と不服を言うのではなく、この世から逃げない生き方、姿勢を神さまから与えられている。まず、そこだけは間違えないようにしたいのです。

ではそうしたわたしたちが、ここからいったい何を聞き取るのか、ということです。まず押さえておきたいのは、どうしてイエスさまはここで、こんな譬え話をなさったのか、ということです。何か理由があるはずです。それはいったい何か。

ここでイエスさまがなさった譬え話は、物語としてはそれほど難しい話ではないと思います。ところが、ここで農夫たちのしていること、主人のしていることをよくよく見ていると、混乱してきます、分からなくなってきました。何がわからな

いのか。それは、ここに出てくる登場人物たちが、あまりにもわたしたちの常識を超えているからです。まず農夫たちです。彼らは主人から次々と送りこまれて来る僕たちを袋だたきにしたり、侮辱したり、遂には殺してしまいます。彼らの目的は明らかです。跡取り息子が送られてきた時に彼らはこう言っているからです。「これは跡取り息子だ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる」。一体全体、どうやったらそういう筋書きができるのか。普通の場合でしたら、僕が殺されれば、どんな主人であっても黙ってはいないだろう。すぐにやって来て、農夫たちを裁くに違いない。そんな理不尽なことがまかり通ることなどあり得ないと考えます。いったい何を考えている農夫たちなのか。そう思います。

そしてもうひとつ、大切なことがあります。この譬え話でどうしてもわたしたちが納得できないことがあります。ぶどう園の主人のやり方です。あえて失礼を承知で言わせてもらえば、この主人の頭はどうなっているのかと思われるところがあるからです。自分の僕を次々と送った。そこまでは何とか理

解できます。けれど、「まだ、一人、愛する息子がいた」（6節）とあります。つまり、この段階では、もう僕は皆送り込んでしまって、残っているのは一人息子だけだ、ということが分かります。僕たちは皆、殺されたか、傷つけられたかして、もう送り込めるような者は主人のもとには一人もいなかったということです。そういう状況にありながら、どうして息子を送ったのか。そこで、分からなくなってきました。もし、息子には跡継ぎとしての権威があって、ここまで送った僕たちに対する農夫たちの行いに仕返しをするというのであれば、まだわたしたちは納得できるだろうと思います。ところがこの主人はこう言います。「『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った」と。お人よしにも、ほどがある。この主人はいったい何をしているのか、まだ気がつかないのか。わたしたちであれば、そう思います。相手を信じるようなレベルの話だろうか、と思います。けれど、ここでぶどう園の主人は、そして父なる神は、農夫たちを信じておられる。全くびっくりすること、驚くべきことなのですが、なおも農夫たちを信じ

て、最愛の息子を送ったというのです。そしてイエスさまはこのぶどう園の譬え話の中で、神のわたしたちへの真実は変わらないのだと言われます。それこそが、ここに、わたしが来ている理由なのだと言われます。

わたしはこのぶどう園の主人のやり方を聴くたびに、全く腑に落ちないだけではなくて、悲しくなることがあります。なぜ愛する息子を送ったのか。なぜ、一番愛している者をむざむざ殺されるようなところに送ったのか。ぶどう園の主人にしてみれば、最後まで手元に置いておきたかったはずなのに、どうしてその独り子を送ったのか、分からなくなる時があります。けれど、この農夫たちの姿は、わたしのこと、自分のこと、自分たちのことなのだ気づいた時、気づかされた時、主人のやり方は何と愚かな、もう少し利口なやり方があったのではないかと思うと同時に、そのぶどう園の主人にそうまでさせてしまった農夫たちの、自分の、わたしの愚かさ、そこまでしなければならなかった主人の思いを知った時、そこにあるのはまず、このぶどう園の主人の悲しみではないのか。農夫たちに

ついでに主人の悲しみ、そしてわたしたちについての神の深い悲しみをわたしたちは知るのではないのでしょうか。そしてそこに気づいた時に初めてわたしたちは、自分たちの愚かさを恥じ、自らを悲しむことができるのではないか、そう思わされてなりません。

イエスさまはわたしたちのために、この物語をしないわけにはいかなかった。しかも、この譬え話はここで終わってはいません。続きがあります。イエスさまはこう言われました。

「さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない」と。でも、本当は滅ぼさなかったのです。殺されても仕方なかったのに、生きることをゆるされました。どうしてなのか。主イエスが十字架にかかってくださったからです。父なる神のさばきはそのようにして、成就したのです。神さまの義は、そうしたかたちで貫かれ、変わることはありませんでした。だから、わたしたちは滅びることから免れたのです。

すでにイースターを迎えたわたしたちは、だからこそ、

そのことをここに刻みつけ、覚え、感謝をささげます。神の心をどれだけ傷つけ悲しませたかを覚えつつも、主イエスが悲しみを越えてわたしたちに語って下さったこの譬え話を通して、喜びの中に招き入れようとしておられるかを深く深く、心に刻みつけることができますようにと心から願います。祈ります。

教会の頭である主イエス・キリストの父なる神さま、わたしたちのこころの鈍さ、愚かさをお許してください。イエスさまのお言葉を聞きながら、そのお言葉が心に留まらないでいます。そのようなわたしたちの鈍さを、どうかあなたが打ちくだいてくださいますように。神さま、あなたがどれだけ豊かな実りを、一人一人にふさわしいかたちで与えてくださっているかを、わたしたちが思い起こすことができますように。今日から始まる新しい一週間を、その思いで満たしてくださいますようお願いいたします。いま、恵みを知らされたわたしたちが、その恵みを携え、嘆く者と共に嘆き、不安を抱えた人々と共にあ

あなたに在る平安を分かち合い、あなたがつくって下さった交わりにおいて希望に与ることができますように。この感謝と願いを主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。

アーメン

讃美歌 讃美歌 21-430 (とびらの外に)

3 番のみ

「私のために 死んだイエスの
その憐れみを なぜ拒むか。
かたく閉ざした 戸を開いて
心の中に 主を迎えよう。」

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の 3 頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と

聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>